

【論文】

ことばの消失プロセスにおける一考察 —段階的に使用範囲が縮小される可能性について—

余 健

1. はじめに

ユネスコが2009年2月に発表した世界危機言語地図（第3版）によると、世界で、約6千あるとされる言語の内、約2500の言語・方言が消滅の危機にあるとされている（UNESCO Atlas of the World's Languages in danger）。また、その中で、日本においても以下の8つの「消滅の危機に瀕した言語・方言」が存在するとの指摘もある（消滅の危機にある言語・方言|文化庁 (bunka.go.jp)）。

【極めて深刻】アイヌ語

【重大な危機】八重山語（八重山方言），与那国語（与那国方言）

【危険】八丈語（八丈方言），奄美語（奄美方言），

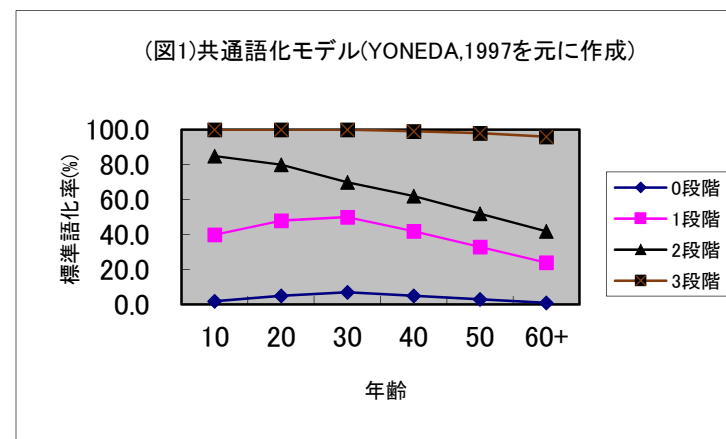
国頭語（国頭方言），沖縄語（沖縄方言），宮古語（宮古方言）

しかし、実際には、上記8つの言語（方言）体系以外にも、中世以前の古語の使用に繋がる伝統的な日本語方言の特徴は、そのほとんどの表現の使用者が、ほぼ70代以上の高齢者に限定されている。この状況を踏まえると、伝統的な日本語方言における、ほぼすべての表現が、消滅または消失危機に瀕していると言えるであろう。本小稿では、現代における伝統的な方言の消滅段階の前段階にある消失状況を概観し、特に、ことばが消失して行く際には、該当言語の話者がいなくなることでその存在が一気になくなる現象以外にも、段階的に使用範囲が、縮小され、消失していくことの可能性に焦点を当て、事例を通じて考察する。

2. メディア等の影響による伝統的方言の消失

2-1 山形県鶴岡市における伝統的方言の消失状況

国立国語研究所によって山形県鶴岡市で行われた3度に渡る継続調査（1950, 1971, 1991年）から、図1に示すような3段階から成る共通語化のモデルが示された（国研, 1974・YONEDA, 1997）。



- 0段階：全年齢層に渡ってほぼ、標準語化が確認されない段階
- 第1段階：交通手段が未発達な状況下で、他地域の人との接触量が一番多い30歳前後の活躍層が最も標準語化の影響を受ける段階
- 第2段階：メディアが普及した状況下で、言語に最も敏感な時期にある10代以下の若年層が最も標準語化の影響を受ける段階
- 第3段階：全世代に渡って標準語化が達成される段階

つまり、テレビを始めとするメディアの発達と交通手段という社会的要因の変化によって、共通語化が進み当地における伝統的方言が消失していくプロセスが確認されたわけである。当地の伝統的な方言の特徴として

は、窓を「マンド」、背中を「シェナカ」と発音したり、「起きろ」を「オキレ」、「行くから」を「行くサケ(ハケ)」と表現したりする特徴等を指し、図1の3段階目(■)においては、伝統的な方言は、ほぼ消失している段階である。

2-2 「ものもらい」の言い方にみる伝統的方言の消失状況

2003年にロート製菓が、同社会員9770名(10代～70代)を対象に、ものもらいの言い方についてのウェブアンケート調査を実施し、余がその結果について、解説を行った(余・ロート製菓2004)。

2003年時点で使用が多く確認された中で共通語形と大きく異なる語形は「メバチコ(大阪を中心とした近畿)・メツパ(北海道)」くらいで、約50年前の調査(国立国語研究所1968)では確認されたマロオト(中国・四国地方)やメガタネ(島根県)、メコジキ(三重県南部等)等のすぐに方言形とわかる語形の多くは衰退傾向にあるといえる。

「ものもらい」における現在の全国的な状況は共通語形とそれに対抗し得る地域の語形(メバチコ：大阪，メ(イ)ボ：京都)中心に集約されつつある状況といえるであろう。

また、上記の傾向は、「ものもらい」以外の方言敬語等においても同様な傾向を指摘でき、共通語の敬語に対抗できるほど使用されている方言敬語は、関西中央部で使用されている「ハル」敬語ぐらいであろう。それ以外の方言敬語は、次節で確認できる「ゴザル」系のようにその多くが消失されようとしている。

3. 伝統的方言の消失段階

3-1 三重県内の方言敬語における消失状況

本節では、現状で、ほとんど耳にできなくなっている「行く」「来る」「いる」の尊敬語に相当する本動詞「ゴザル」と補助動詞「～テゴザル」に焦点を当て、「ゴザル」系敬語表現の消失プロセスについて考察する。

藤原(1978)では、「室町時代に京都中心にさかんであった「ゴザル」が、今日(1970年代頃)において、若年層では用いられなくなっており、古老た

ちが使うことばとなった」とあり、高度経済成長期真っ只中であった1970年代当時で、既に、「ゴザル」は、全国的に高年層中心の表現になっていたことが伺える。三重県内の使用状況においても、東紀州を除く地域で、6例の具体例が挙がっており、本動詞の「ゴザル」の用法は、3例、補助動詞「～テゴザル」の用法においては、4例が確認され、付属語である後者の用例の方が中心的になっていることも興味深い。以下に代表例を1例ずつ挙げる。

本動詞の例：アチラカラ ゴザルヤッタラ（志摩半島）
（あちらからいらっしゃるのだったら）

補助動詞の例：ゴム モッテ ゴザル（伊勢北部）
（ゴムを持っていらっしゃる）

なお、本動詞「ゴザル」と補助動詞「～テゴザル」においては、自立語である前者の方がより古く、付属語である後者は、より新しいものと一般的に考えられ、三重県においても、「ゴザル」の方がより古い形式で、「～テゴザル」の形式は、後に本動詞の用法から派生した新しい形式と想定される。

さらに、永野(2021)においては、多気町旧勢和村出身の収録時、60代の女性(以下ではA氏)と40代の女性(以下ではB氏)を対象とした電話による会話調査を実施し、音声、文法、敬語表現を中心に、当地の特徴に関する分析がなされている。

その会話調査には、確認されなかったが、普段、A氏やA氏の姉(旧勢和村出身70代)が使用している「～テゴザル」の典型的な用例を以下のとおり挙げられるとの情報提供を永野氏より受けた。

- ㊦ (A氏の息子の嫁が) まだ寝てござる
- ㊧ (A氏の息子の嫁が) また食べてござる
- ㊨ (A氏の夫が) また呆けてござる

永野氏が普段耳にするA氏やA氏の姉が、使用する「～テゴザル」の用法は、ほぼ上記の「敬意を表さない話題の人物(第三者)を揶揄する」用法(㉗から㉘)のみであるとのことである。

さらに、この「～テゴザル」における「話題の人物を揶揄する表現」の用法について、川原田智子氏（名張高校）に、依頼して、三重県内における多気町勢和村以外の状況を確認頂いた。

その結果は、以下の①、②に示すとおりである。

○川原田智子氏による確認調査の結果（2020年1月25日確認）

㉗津市白山町出身者（60代男女各1名，計2名），（30代女性2名）

- ・「～テゴザル」は一世代上（80代以上の人）が使うが、自分は使わない、あまり聞かない
- ・「（あんなことを）～テゴザル」のように、マイナスのニュアンスで使われるのを聞く

㉘伊賀市北部（60代男性1名）

- ・本動詞，補助動詞ともに「ゴザル」を使用
- ・「来る」の意味で使うことが多い
- ・「（あんなことを）～テゴザル」のように、マイナスのニュアンスで使用することもある

先に確認した旧勢和村出身のAさんの用法と同様に、「～テゴザル」の「話題の人物(第三者)を揶揄する表現」は、津市白山町や伊賀市北部の三重県内における他地域においてもその使用が確認されたものといえる。

ここで、方言敬語である「ゴザル（～テゴザル）」の三重県内における消失プロセスについては、以下のように考えられる。

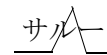
①ゴザル(本動詞・敬意有)を使用 → ②ゴザル(本動詞・敬意有)と～テゴザル(補助動詞・敬意有)を併用 → ③～テゴザル(補助動詞・敬意有)を使用 → ④～テゴザル(補助動詞・敬意無)を使用 → ⑤「～テゴザル」の消失

つまり、当地でも元々は、存在感のある自立語の本動詞で敬意を持つ「ゴザル」が、中心的に使用されていたかつての①の時期が想定される。次いで、付属語の補助動詞「～テゴザル」が派生し、「ゴザル」と併用される②の段階(藤原1978)を経て、より存在感の薄い付属語の補助動詞「～テゴザル」を中心的に使用する③の段階を経たものと想定し得る。最終的に、旧勢和村における現状の用法(㉗～㉘)や津市白山町(㉗)、伊賀市北部(㉘)で確認される「本来の敬意が形骸化された話題の人物を揶揄する」用法に、使用範囲が狭められた④の段階に至っているものと想定できよう。最終段階として、今後⑤のゴザル系表現(ゴザル・～テゴザル)の消失段階が予想される。

3-2 京阪式アクセントの拍内下降における消失状況

三重県の北・中勢地域を含む近畿地方を中心とした京阪式アクセント地帯で、千年以上、伝承され、現在、衰退が著しい拍内下降においても、3-1節で確認されたような使用範囲の縮小が確認されている。拍内下降とは、1モーラの中で、以下に図示するような急激な上昇と下降が実現されるアクセントの特徴を持つ。

京阪式アクセントの拍内下降を取る単語：猿・窓・秋・鍋・鶴等



上記のような拍内下降のアクセントパターンは、上野(1977)によると平安時代に編纂された類聚名義抄に確認される。その約千年後の大阪市内では、1958年以降に生まれた人には、この拍内下降が、発音されなくなっている傾向が確認された(岸江1990)。

筆者が、大阪の大学院の研究生となった1996年に、1976生まれの当時二十歳の大阪府箕面市出身者との会話の中で、以下のような拍内下降が確認された。

大阪では、箕面市出身というとき、サル、サル 言うて馬鹿にされる

「箕面市には、国定公園があってそこには猿が住んでおり、大阪出身者同士の会話において、自分が箕面市出身というとき、そのことを相手に揶揄される」という文脈における拍内下降の実現であった。しかし、本来、1976年生まれの人には、上述の岸江(1990)に基づけば、拍内下降を既に失われてしまっている人たちの世代であるはずが、実際には明確に実現された。この場面における拍内下降の実現については、以下のように考えたい。つまり、この箕面市出身者において普通の会話の中では、拍内下降は、ほぼ実現されない特徴であると考えられるが、上記のような「自己卑下」せざるを得ない特殊な場面においては、その意味を強調するために、拍内下降が実現されたものであると考える。千年以上もの間、日常会話の中で、単語アクセントの特徴としての発音が伝承され続けてきた拍内下降が、消失寸前の段階で、使用範囲が縮小され、自己卑下するようなマイナスの場面に、その使用が追い込まれたものと考えられよう。

4. まとめ

弱肉強食の資本主義のもと、テレビを始めとするメディアや交通手段が発達し、共通語化や力のある方言形への集約が進んだ。それらに伴い多くの伝統的な方言形が、失われて来ている。一方で、その消失段階においては、一気に消失してしまうのではなく、三重県内の方言敬語形「～テゴザル」のように、消失前段階で、本来持っていた敬意が形骸化され、話題の人物を揶揄する場面にその使用が狭められる段階を経る可能性が確認された。また、千年以上受け継がれてきた京阪式アクセントにおける拍内下降が、消失する前段階で、日常生活で広く発音されていたかつての状況から、自身のことを卑下する場面にその使用が追い込まれている具体例が確認された。

失われていくことばのプロセスにおいて、その使用が一気に消失されず、段階的に、マイナス方向の使用場面に狭められていく場合があり得る

ことを確認できたものとも言えよう。

この点は、さらに、普段の会話の中で、特に、話題の人物を揶揄したり、自己卑下したりするマイナスの意味合いを相手に強調して伝えたい場面において、消失寸前の伝統的な方言形が、有効に使用されているものとも解釈できよう。

参考文献

- 江畑哲夫(1995)『三重県方言民俗語集覧』2 私家版
 上野善道(1977)「日本語のアクセント」『岩波講座 日本語5 音韻』岩波書店
 川原田智子(2009)『津市白山町の敬語表現 ―ンス・テヤを中心に―』平成21年度修士論文 三重大学教育学部研究科
 岸江信介他編著(2001)『名古屋―伊勢間グロットグラム集』
 国立国語研究所(1968)「第112 図 ものもらい」『日本言語地図第3集』LAJ_112.pdf (ninjal.ac.jp)
 国立国語研究所(1974)『地域社会の言語生活―鶴岡における20年前との比較―』秀英出版
 Masato YONEDA(1997) Survey of standardisation in Tsuruoka, Japan: Comparison of results from three surveys conducted at 20-years intervals 『日本語の科学』2 国立国語研究所
 永野帆乃(2021)『多気町旧勢和村における方言について―談話レベルからみる一考察―』令和2年度卒業論文 三重大教育学部国語教育コース (提出予定)
 藤原与一(1978)『昭和日本語方言の総合的研究 第1巻 方言敬語法の研究』春陽堂書店
 余健・ロート製薬(2004)「ものもらい Map(全国1万件の回答に基づく分布の解説)」 <https://jp.rohto.com/learn-more/eyecare/monomorai/map/>

(謝辞)本稿を執筆するにあたり、「～テゴザル」等の用法における使用状況を確認頂いた川原田智子氏(名張高校)と永野帆乃氏(69期生)に感謝申し上げます。